

昭和40年益田商業高校卒業後、卸売業勤務などを経て、平成9年～12年有限会社アップルを経営、現在、島根県社会福祉事業団 属託職員勤務。

「出会い」が変わる。

介護施設での就労は、私が五十三歳の時です。事業に失敗し、築いた信用や財産も全てを失ってその日暮らして悪戦苦闘の日々が続く時でした。職業安定所の求人情報を毎日眺めて、僅かな可能性を求めて何度も何度も面接試験を受けました。

不況の中、高年齢の負け組で特別な資格を持たない状態での求職は、就職には大きなハンデでした。

打開出来ない状況が続く、例えは悪いのですが、「朝に紅顔ありて夕べには心の風邪となる」の状態でした。そんな私を家族が気遣い、ひそひそ声での会話は、更につらさが増しました。そんな日が続くある日、一通の封筒が郵便ポストに差入れてあり、連絡が取れない私あてに、高年齢者職業相談所の所長さんが足を運ばれて、届けられたものです。

内容は先般面接を受けて、不採用の連絡を受けた介護施設に、一ヶ月臨時で働きませんかとの事です。

藁にも縋る思いで早速施設を訪問し、一ヶ月間の雇用通知書を頂きました。

介護の仕事は全くの未経験で、関心もありませんでした生活の為の働き場所探し志望動機でした。

五十歳過ぎの男性には、介護員は想像以上に厳しい仕事でしたが、背水の陣で職務を行ないました。

作業に躓き、私の子供より年下の職員に叱責され悔しさと情けなさに涙を重ね、命の大切さを学び、身体の不自由な方々が、毎日を精いっぱい生きる姿に、一時期は、五体満足の私が、自分の勝手に、受命の逃避を考えた事が恥ずかしく思いました。

今は、介護員の職種は変わりましたが、この施設での勤務は、一年毎の属託職員の雇用契約の更新でお蔭様で八年目になります。良き職場に出会いを感謝し目標に「精励恪勤」を掲げて頑張ります。

私が介護施設で利用者の方に感じることは、求めはハードからハートだと思えます。つまりストレスのケアです。利用者の要望でよくお聞きするのは、「外に出たい」「話し相手がほしい」「美味しい物が食べたい」などのごくノーマルなことです。

私は三年前にボランティアで利用者のドライブを提案し採用されて、毎月二回実施致しています。

お年寄りとお話すると、夢中で思いを問われます。浅学菲才な私はこの頃から、図書館通いが始まって受売りでテレビドラマの解説や質問にお答えします読書にも慣れて、今は毎週二冊借りています。

この施設での利用者の平均年齢は九十歳を超える状態で、いずれ二世代介護も想定されます。当然介護員も孫や曾孫の年齢がお世話にあたります。若い方には生活必需品のパソコンや携帯電話などの機能は魔法なんです。テレビの普及も人生の半分です。言葉や機器の変化は早く、お年寄りには大変です。少々は理解の出来る子供年代で団塊世代の私達の関わりが今は必要何です。

優しく、ゆっくり、笑顔で、思い出話や昔話に、花が咲き、両手を合わせて「今日は楽しかったありがとう」の笑顔が私は好きなんです。

人との「出会い」、仕事の「出会い」性格や趣味迄変える「出会い」に感謝です。